



## 東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

ヴォーン・ウィリアムズ：《命の家》

ヴォーン・ウィリアムズの連作歌曲集《命の家》は、1903～04 年頃の作。ラファエル前派の画家で詩人のダンテ・ガブリエル・ロセッティのソネット集から 6 篇を選んで作曲した。

「Love-Sight（愛する人びと）」は、最愛の人を見る喜びと、いつかそれを失うかもしれない恐れを歌う。「Silent Noon（静かな真昼）」は、ロセッティの色彩感をヴォーン・ウィリアムズが見事に音化した傑作。夏の野原で寝そべっている二人に「時が静止したかのような永遠の瞬間」が訪れる。

「Love's Minstrels（恋を歌う吟遊詩人）」では、吟遊詩人の「堅琴」を模したピアノ伴奏が詩情を余す所なく伝える。「Heart's Haven（心の隠れ家）」は、愛がもたらす加護を讃える。「Death in Love（愛の死）」は、愛の絶頂に潜む「死」の影を見る。徐々に重くなっていく曲調が聴きどころ。

「Love's Last Gift（愛の形見）」では、愛のギフトが差し出されるが、第 5 曲と同じように音楽がフェードアウトしていき、穏やかに曲を閉じる。

A. マーラー：《5 つの歌》より

グスタフ・マーラー夫人であったアルマは、ツェムリンスキーのもとで作曲を学んだ才女（ただし、マーラーの生前は作曲を禁じられていた）。《5 つの歌》の出版は 1924 年。今回はその中から 3 曲をお届けする。

「Hymne（賛歌）」は、ノヴァーリスの詩を用いた雄篇。後期ロマン派特有の濃密な和声と不断に揺れる旋律が、聖なる父への帰還と神秘的な合一を素描する。神との邂逅と昇天を歌う「Ekstase（恍惚）」は、O.J. ビーアバウムの詩。うねるような伴奏と跳躍する音楽が、あふれ出る官能を表現する。「Der Erkennende（識る人）」は、F. ヴェルフェルの哲学的な詩を用いた曲。表題は「何一つ自分のものにならない」ことを認識するという意味。

ワーグナー：《ヴェーゼンドンク歌曲集》

ワーグナーはスイスでの亡命時代、実業家でパトロンでもあったオットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデと衆目をはばかりの関係を持った。それはやがて楽劇《トリスタンとイゾルデ》に昇華されるわけだが、そのマティルデの詩に作曲したのが《ヴェーゼンドンク歌曲集》。5 つの歌には、叶わぬ思いをひたすら夢想する濃密な詩情があふれている。なお、本作は《トリスタンとイゾルデ》と同時期に作曲されたため、共通の楽想が聴取される。

ブリテン：《ジョン・ダンの神聖なソネット》

作曲されたのは 1945 年。ブリテンは、ヴァイオリニストのユーディ・メニューインとともにドイツへ渡り、解放直後のベルゲン・ベルゼン強制収容所で演奏を行なった。そこで目にした地獄絵図は、生涯消えることのないトラウマをブリテンに植え付けた。そして帰国直後、熱にうなされるように書き上げたのが、全 9 曲からなる《ジョン・ダンの神聖なソネット》。ここでは、単なる宗教的な祈りではなく、「死、罪、そして神への根源的な問いかけ（あるいは怒り）」が音楽として示されている。ピーター・ピアーズによって 1945 年に初演されたが、高音域が容赦なく続き、強靱な声が必要される。